

添田 仁さん(39)

「歴史の研究者として、史料を机の上で読むだけで、災害で失われるときに何もしくなくていいのだろう。先人の遺産を守り、地域の人たちに伝えたい」

茨城大人文学部で准教授をしながら、震災や水害の被災地で歴史的史料を保全するボランティア団体「茨城史料ネット」の事務局長を務める。学生ら約三十人を中心に、東日本大震災や関東・東北水害の被災地で、がれきや壊れた建物から古文書などを見つけ、所有者の許可を得て保管している。

阪神大震災の直後に神戸大に入学。大学院で、被災文化財の保全を提唱する教授に師事した。ボランティア

■ 先人の遺産を守り 地域の人たちに伝えたい



文化財 災害から救う

ア活動を手伝い始め、助教や特命講師になると、本格的に関わるようになった。東日本大震災では、宮城県で活動した。北茨城市に立ち寄り、一時保管場所になった廃校で、積まれた史料の多さに圧倒された。津波で水に浸るなど、傷みもひどかった。「自分にできることがある」と感じ、二〇一三年度の茨城大の准教授の募集に応募。採用され、既に発足していた茨城史料ネットに加わった。

書や地図、絵、仏像など。「未指定だから重要でないわけではない。地域の歴史や文化を雄弁に物語っている」と語る。

保全の対象は、行政に文化財指定されていない古文

災害で土蔵が崩れたり浸水したりすれば、史料も災害がれきに紛れ、廃棄されることが多い。ふすまの内側の下張り紙には古文書が使われていて、気付かれないまま捨てられることもあ

る。水害で被災した常総市では、災害ごみとして路上に出されたふすまから江戸時代の古文書を見つけた。これまで保全したのは数万点。洗浄、消毒、修復、内容の調査、目録の作成など、膨大な手間がかかる。東日本大震災の被災史料の保全作業は、四年以上が経過した今も続く。保管場所を確保し、酸化を防ぐ特殊箱も購入しなければならぬ。人も金も時間も不足しているのが実情だ。

それでも、「自分たちがやらなければ、確実に失われてしまう」という義務感がある。保全した史料を調査した後、地元住民に説明をすると、地域の歴史が分かって喜ばれることも励みになっている。

「災害前に専門家が文化財などの所在を共有し、広域で協力して守る仕組みを準備しておくべきだ」と訴える。地域の歴史的史料の保全が、当たり前の活動として広がるのが理想と思っている。(宮本隆康)

そえだ・ひとし 1976年1月、広島県三原市生まれ。95年4月に神戸大学に入学。大学院院生、助教、特任講師などを経て、2013年4月に茨城大学人文学部の准教授に就任した。江戸時代にあたる日本近世史を専門にしている。茨城史料ネットは寄付金やネット会員を募集中。寄付の方法などはホームページに掲載している。

いはらき
ひと物語